

中学生・作文 愛媛県知事賞

「故郷を守る」

松山市立中島中学校 3年 ^{もりた} 森田 ^{ななみ} 菜々美

ようやく訪れた七月。約二週間後から始まる夏休みを前に、受験生である私は「受験勉強を頑張ろう」と意気込み、弟は友達と遊ぶ約束をし、夏休みを今かと待っていました。

しかし、七月六日。私は雨の音で目を覚ました。慌ててテレビをつけると、私の住む松山市・中島には大雨・洪水警報が発表されていました。後に「平成三十年七月豪雨」と呼ばれ、「激甚災害」に指定される大災害になるとは思ってもいませんでした。降り止まない雨の音を聞きながら不安な夜を迎えました。

七月七日。私は朝のニュースに目を疑いました。土砂災害により寸断された道路。水や土に埋もれた街。懸命に行方不明者を探す人々。身を寄せ合い、励まし合う人々。私の住む県・地域だとは思えませんでした。ついに、中島にも避難勧告が出ました。何度も防災無線が流れ、何度も「大丈夫？」という連絡が届きました。避難するかしないかは個人の判断に委ねられました。友人は家の近くに山や池があるため避難したと聞きました。私の家では、「避難しない。」という判断をしました。家の周りには山も川もなかったからです。幸い、被害はほとんどありませんでした。

七月八日。雨は止みました。中島では各地で浸水や土砂の被害がありました。唯一の道路が土砂でつぶれ、その先に住む人たちは完全に孤立状態に置かれてしまいました。友人の家も浸水被害にあったそうです。自分の故郷がこんなにも姿を変えてしまったことに落ち込みました。しかし、災害があった直後にも関わらず、人々は復旧へ動き出しました。

今回の災害では、各地に大雨特別警報が出され、地すべりなどの土砂災害が起きました。豪雨が引き起こした土砂災害では二百人を超える人々の尊い命が失われました。ニュースでは、家族を失った人、家を失った人などの胸中が連日報じられました。胸が苦しくなりました。また、一歩ずつ着実に復旧・復興へ歩みを進める人々の姿に心を打たれました。

私はこの災害で二つのことを学びました。

一つ目は、「大雨や大地震が生む土砂災害は、かけがえのないものを一瞬にして奪い取る」ということです。画面越しに見た景色、三日ぶりの登校中に見た景色を忘れることはないでしょう。土砂が流れるのは一瞬です。しかし、土砂を取り除くのには何日もかかります。また、失ったものは何年かけても戻ってきません。土砂災害は本当に恐ろしいものだと思います。

二つ目は、「自分や家族の命は自分が守る」ということです。これは災害前から何度も教えられてきた言葉です。土砂災害の恐ろしさを知った今、改めて大事なことだと感じました。

中島は高齢化が大きく進んでいます。高齢者の命を救うことができるのは、地域の若い人々です。私自身も、その一人だと思っています。もし、新たな災害が起こったときは「減災」のために避難を呼びかけたり、復旧・復興作業にボランティアとして携わっていきたいです。

今までなら、美しい星が輝いている七夕の夜の空は、土砂災害の引き金となり、多くの人々の命を奪い取った雨雲に覆われていました。今年の七夕は私にとって、土砂災害の恐ろしさを思い知らされる日になってしまいました。

「今までの経験は通用しない」この言葉を耳にすることが多くなってきました。今回の「平成三十年七月豪雨」のちょうど一年前にも「平成二十九年九州北部豪雨」が起っていました。近年、地球温暖化による台風や豪雨が増え、それに伴い、土砂災害も大きく増えてきています。天災は人間の力で防ぐことはできませんが、「日頃の備え」、「災害に対する意識」などの、日頃からの心構えが命を守る武器となります。まずは災害を「知る」そして、起こったときにどのような行動を取るか「話し合う」、防災グッズを用意するなど「実行する」ということが大事だと考えます。

今でも道端には折れた木や流れ出た土砂があります。車が通れば土ぼこりが舞います。その中を自転車で学校に通っています。二階の教室から見る山の色は一部、茶色に変わってしまいました。

私の住む島・中島は昔からみかん栽培が盛んです。そのため山が多く、今までも豪雨が降る度に土砂災害が起っています。何度くずれても復旧に努めてくださる方々、安全に過ごせるように擁壁を作ってくださいる方々に感謝して生活していきたいです。

「土砂災害から大切なものを守る」これが中島、そして日本の課題だと思います。